

苦しんでいたリウマチが楽になりました。

「リウマチになった3年を省みて」

梅田 勝也 76歳

2016年11月1日

はじめに

不治の病と言われているリウマチ、膠原病は治る病気です。決して諦めないで下さい。普通一般の病院は、免疫抑制剤を出して痛さを一時的に消していますが、いずれ必ず薬害による後遺症が出ます。今も友人が苦しんでおります。人間の一番大切な免疫細胞を殺さず、リウマチ、膠原病の原因であるヘルペスウイルスを殺す西洋医薬と、悪い病気から身体を守ってくれる免疫細胞を活発にする漢方薬だけを服用し、信頼できる医師の指導に素直に従っただけで、85%まで治ってまいりました。

皆さんよくご存知な大阪高槻駅前にあるリウマチの名医、松本医院に通って2年8ヵ月になります。ヘルペスウイルスというものは、どれだけ悪賢いかを思い知りました。筋肉痛だけでなく、内臓全てに災いを起こす不屈な奴で、その上、炎症を起こすので時間がかかりました。あとの15%については、松本医院の治療をこのまま続けるとともに、スポーツ医学の中にあるスロートレーニングで完治させたいと思っております。

発病の原因

今から9年前、平成19年10月頃アレルギー性鼻炎になり、耳鼻科で点鼻薬と抗アレルギー薬(オノンカプセル)、そして、プレドニン錠5mg(ステロイド)を飲みました。その後耳鳴りがするということで医者にかかり点滴を週に1回×6回打ちました。1ヵ月後、狭心症になり、循環器科でバイアスピリン錠100mgと中性脂肪を下げるクレストール2.5mg錠をしばらく続けました。そのうち、CK(CPK)クレアチンキナーゼ値が馬鹿みたいに上昇しましたが、気にも留めず通院しました。毎回診察前に体脂肪が出るスケールに乗ると、毎回筋肉量と質がやや乏しく、普通以下と表示されました。当時ボディビルジムに通い、胸囲が1m余り有りましたので、気にもせず看護師と共に機械の故障にしておりました。

その後もいつものように、ジムで筋トレを続けましたが、2年後、両足、首、腹筋が痛み始めました。スポーツドクターを探してあらゆる診察を受けた結果、「血液内科で精密検査を受けてくれ。」との事で、関西労災病院へ行きました。結果は、白血病の疑いもなく陰性でした。そして整形外科を受診しましたが骨癌ではないと分かり、かかりつけ医に報告して、初めて痛み止めを服用しました。その後も痛みは強くなるばかり、薬の効く時間は短くなるばかりで不安になりました。そこで、かかりつけ医に、「もしかしたら、膠原病ではないですか？」と聞くと「今は良い薬が出来ているから大丈夫ですよ。」と言われました。更に「絶対に治りますか？」とお聞きしたら、「痛み止めはありますが、治療薬は・・・」と口を濁らせ、「でも一般的にはステロイドを使い薬になっておられますよ。」との返事でした。昔、愛犬が癌になり、ステロイド治療から腎臓を侵して死んだ経験があります。悩んでいた時に友人から連絡があり、いろいろ調べたところ、「リウマチ性多発筋痛症だと思う。高槻駅前に日本で此処しかないリウマチの名医がいる。ここはステロイドを使わず、漢方で治すらしいので、騙されたと思って行け。」との事で腹を決めました。

平成26年2月松本医院を初診。松本医院の患者になる。

1. 院長は、温和そうな笑顔で、「此処に来るに当たって、勉強してきたか？」と聞かれました。(ビックリして友人との事情を話す。)
2. 「免疫の知識がない人に1から説明する時間がない、ネットで勉強してくれ。」と言われました。
3. 更に驚いたことは、(病気は薬と医者が治すものと、大半の人は思っているが)先生は「病気は患者自身の免疫で治すもの、漢方薬は免疫を高めて、医者は手助けをするだけ。」と言って血液検査に進みました。実際全てのリウマチ関連の血液検査が、陰性にも拘らず、関節の痛みを訴える患者が増えているそうです。しかし、リウマチでは免疫グロブリンγ (I g G抗体を含んでいる蛋白)の上昇や、血沈(炎症の度合いを示す検査)やZTTやTTTの一過性の上昇が見られることもあり、それらがすべて陽性になっている時は、かなりの重症のリウマチなのです。そのため、松本院長は総合の血液検査は、外注検査に出されるが、血沈だけは、自院で行なって、より正確な数字を患者一人ひとりに報告されているのです。

治療薬によって、リバウンドが始まった。

初診の日の晩、湯船に漢方薬を入れ入浴しましたが、風呂から出ると激しい寒気を覚え、また入浴するという事の繰り返しになりました。最後は電気毛布上下を強にして、1時間震えていました。翌日先生に聞くと「それが第1回のリバウンド」と言われ、処方されたヘルペスの増殖を阻害する薬ベルクスロン

錠400mgを、3錠、2錠、3錠、2錠と1日10錠を服用すると、手、足、首、胴全ての筋肉の痛さが出てきました。おまけに布団の中で、背筋のこむら返りを起こしました。これには本当に参りました。ボディビルのベンチプレスを思い出し、仰向けに寝て足の両膝を立て、尻と肩甲骨をマットに当てて、腰と背中をそらす様にして両手はバーベルを持っている格好をして、腰と両肩は付けたままで、背中反らしたままで上げると、こむら返りが治りました。しかし10分ももちませんでした。痛みが出ては反り返す、その繰り返しで疲れて寝てしまう始末でした。しかし、眠れない日が何日もあり、絶えず痛さとの戦いでした。松本院長は、「これは免疫とヘルペスウイルスとの初めての戦いなので、痛くなるのは当然。痛みは治す為に闘っている証拠だから我慢するように。」と言われました。

5つのグロブリンの中で、IgG抗体はリウマチの根本、ヘルペスは薬では殺せないのので、免疫細胞の力を借りて闘う、いわゆる、ナチュラルキラーT細胞で戦うのです。化学物質とIgEを武器として闘うとアレルギーになり、IgGで闘うと膠原病やリウマチになります。実は皆、同じ化学物質と闘っている事自体、国内外の多くの医学者は解からず、また間違った著書が数多く発刊されています。病気の原因のひとつは、患者が近視眼的に、痛み、痒みは薬を付ければ治ると信じ、不安を抱くことなく薬を使用している事であります。というのも、薬の大部分は免疫抑制剤であり、患者は自分自身を守ってくれる警備システムである免疫細胞を殺す薬を買い求めていることになるのです。免疫が殺されると、抵抗力がなくなり、感染症にかかりやすく、風邪をひいたり、肺炎になり易い体になるのです。

国内外の医学会への疑問点について

少し話が難しくなりますが、WHO（世界保健機関）では、270種目の薬で十分と言っているにも関わらず、日本は一万種類以上の薬を労働厚生省は認可しています。昔は小さな薬局で、陳列には包帯、赤チン、メンソレータム、漢方薬が並び、調剤室には薬剤師さんがトンプクを調合してくれていたのですが、今では百貨店のような大きなドラッグストアになってきました。

先日あるテレビ番組で医薬評論家が「製薬会社はマッチポンプである」と言っていました。製薬会社で病原菌を造り、自社製薬で殺菌薬を製造して、各大病院や大学病院の教授たちと内々のバックマーゲンで、厚生労働省の認可を取って世に出していると聞いた時は、なるほど、これがドラッグストアの増大に繋がっているのかと思いました。

更にもう一点、ヘルペスウイルスの増殖を阻害するアシクロビル錠400mg（ベルクスロン）はリウマチ、膠原病患者にとっては必需品で、これがあるから治るのです。問題は医療保険が利かない為1錠100円する事です。医療保険が利けば安くなり、リウマチで悩んでおられる方、特に我々年金受給の患者

たちにとっても楽になります。抗ヘルペス薬がリウマチや膠原病に対しても適応となることを祈ります。患者の全身に起こる病状は、ほとんどヘルペスウイルスによって引き起こされている事を、医学会は承知の上で、保険適用を拒んでいるか、それとも効用について無知なのか？何故ならばアシクロビル錠によって病気が治るからです。

アシクロビル保険適応を認可して貰う為に、松本院長は相当の忍耐と費用を患者のためにつぎ込まれています。以前は保険で抗ヘルペス薬であるアシクロビル錠を処方し、アシクロビル錠の効果を確認するためにヘルペスの抗体価を調べておられました。が、保険医療のレセプトをチェックする支払基金に査定され、多量のアシクロビルと高額検査の料金を院長が負担されました。松本院長はクレームを述べられましたが、審査委員は保険請求を認めませんでした。

長年研究してこられたヘルペスウイルスの抗体価のレセプトが毎回査定されていると言う事は、抗ヘルペス剤で内臓をはじめ全身の病気が治る事を、日本医師会が把握していて、日米共同で無言の阻止活動を行っているとも受け取れます。これでは患者はたまりません。

中国をはじめ、近隣諸国が日本への領土、領海、領空の侵入、侵犯をして、国も警戒監視活動を行なっているが、それ以上に、日本医師会の動向に警戒感を抱いています。我々は健康診断を受け、病気を早期発見し、早期治療することにより、健全な身体を維持し働いています。がもし、医師会が医療を営利的に考えたとすると、国民は困ります。

昔から患者は医者を信頼しています。医師から「この薬は〇〇によく効きますから服用してください。」と食用粉末のプラセボ（偽薬）を渡されたら、翌日「先生よく効きました。有難う。」と患者が言ったという話があります。この例から、患者は医師の出す薬に疑問を持たない事がわかります。だから医者は患者から信頼されているということ、常に頭に入れて貰いたいですね。

大病院で診察を受けた際、医者はモニターを見ながら患者からの病状を聞き、後は、検査結果を報告するだけで、人（患者）をみていないと感じる事があると思います。松本院長は人を見て話を聞いて、意に反する者には怒鳴りつけることもあります。最後には握手をして患者の気持ちを知らうとしてくれます。日本医学会はガイドライン（一般標準治療）に示した以外は何もしません。そして、病気の原因になっている何億種類の抗原には手を触れず、人として一番必要な免疫を殺せば症状が出ないと知っているの、強い薬（プレドニゾン、ステロイド）を出します。

免疫抑制剤に気を付けよう。

免疫とは「疫（病気）を免れさす。」という意味です。人の細胞は体を常に一定の状態にして、平和に暮らしたいと思っていますが、外的異物[化学物質]が入ると、自己[同じ人のタンパク質]と非自己[外敵]を見分けて、非自己を排除

する機能があります。殺せないが増殖もしない化学物質に対しては、殺したり、溶かす事ができないので、わざわざクラススイッチをして、Ig E抗体を作り体外へ排出するのです。クシャミもその排出機構の一つで、時速100 km以上で飛ばし、鼻水を出すことで水洗いまでしてくれます。ところが本人は鼻水が出るのが嫌で何回もティッシュで、鼻をかんだり、薬局で鼻水を止める為の、スプレー（中味は大半がステロイドで免疫を殺す薬）を使っています。

また、長期に渡りストレスがかかっている人は、神経的にも肉体的にもストレスに耐えるため、自分の副腎髓質からアドレナリンを出し、更に副腎皮質からステロイドを出し続け（1日、0.5 mg）結局自分自身で免疫を抑制する事になり、リウマチになる人が増えてきていると聞いております。

現代医学は、異物を排除しようとする免疫の働きを一時的に抑制するだけですから、Ig EやIg G抗体やリウマチ抗体が、再び作り出されていて、まるでイタチごっこで、永遠に闘いが終わらないのです。松本院長は免疫の働きを一切抑制せずに、アレルギーとして出させ、ただ症状を漢方で楽にするだけで、Ig E抗体やIg G抗体や、リウマチ関連抗体が作られなくなり、闘わないで痛みが取れる事を発見し、これを自然後天的免疫寛容と名付けられました。

松本院長と同じ考えを持つ、アメリカのハーバード大の臨床教授の本と出会う。

日頃から、治療以外に食べ物でさらに免疫を上げるものはないか調べるため図書館に行ったところ、アメリカNo.1ベストセラー、Dr. ジョエル・ファーマンの『100歳まで病気にならないスーパー免疫力（ファイトケミカル）』という本を見つけました。

ハーバード大臨床教授ジョン・アブラムソンはその著書『薬漬けのアメリカ』の中で米国の薬漬け社会に苦言を呈しています。どんな医学的介入を検討する時でも、背後の事情を良く考慮しなければならない。医学的介入について医師たちが得ている情報は、介入治療させようとする偏った内容です。その根拠となる、調査研究が製薬会社の資金提供で行われ、結果解釈も、製薬会社によって行なわれているのですから、少なくとも出資者の息が掛かっている事は確かです。最も権威ある医学雑誌に掲載されている論文も、今や緻密な科学研究と言うよりも、事実上薬の宣伝材料と化しています。

医学従事者が受けている教育により得ている情報も、製薬会社の商業的利害に左右され、あくまでも企業利益を上げる事が、彼らの最大の目的です。現代医療の医師は、人々の健康改善を第1に考える専門職と言うよりも、製薬業界の為の流通機構の発展に寄与して来たようなものだと書いてありました。また、「患者の健やかな暮らしをサポートする真の医療システムとは1. 障害を取り除いて、健康改善を図る。2. 健康的な生活習慣（禁煙運動、食生活の改善等）を勧める。3. 病気の原因とされる化学物質、毒性物質から患者を守る。これらが中核となりますが、米国の医学会では、悪い食習慣が原因で生じる健康問

題に対しても、毒性と危険が伴う薬を処方する事が、主な介入法となっているのが実情である。」著書に書いてありました。

スーパー免疫力を増やす為のスーパーフードとは、工業的に作られた化学物質ではなく、ファイトケミカル（自然植物性の中に含まれている化学物質）です。これが、正常な免疫機能を強化してサポートすると言われていています。

最近、「病気にならないように、サプリメントを飲んでいまして、大丈夫です。」と言われる健康な方が増えてきました。幾ら果実何個分、野菜何グラム分が入っているとは言え、小さなカプセルの中身は、100%化学物質から出来ており、人によっては口から胃に入ると化学変化を起こして、逆に、病気を引き起こす人もおられます。出来れば自然の畑から採れた、新鮮な野菜を摂る事によって、無害で身体を守ってくれる免疫細胞がより強く、活発になるのです。要点をファーマン博士の本から抜粋させていただきます。

“正常な免疫機能を強化して、サポートするファイトケミカル（植物性科学物質）スーパー免疫力を生み出す植物類ベリー系の果物や、ザクロに含まれる、強力な成分と青物野菜やキノコ類タマネギ等に含まれる成分と、組み合わせられると、ヒトゲノムに、組み込まれている驚くべき自然治癒は、自己防衛機能に刺激を与えて、活発になります。”

ファイトケミカルの種類については、イソフラボン、アントシアニンを始め19種類ありますが、この中に、細胞免疫力を高める、何千と言う植物由来成分が詰まっております。ファイトケミカルは、あらゆる病気の防衛的役割を果たします。

1. 解毒酵素を誘導する。
2. フリーラジカルの生成を抑制する。
3. 発癌性物質を非活性化して、解毒する。
4. 毒素による破壊から、細胞構造体を守る。
5. 破壊されたDNA配列を修復する機能を促す。
6. 傷ついた遺伝子を持つ細胞の複製を防げる。
7. 抗真菌、抗細菌、抗ウイルス効果を促す。
8. 傷付けられたり、書き換えられたりしたDNAの機能を妨げる。
9. 免疫細胞が病原菌や癌細胞を殺す能力、細胞毒性（障害性）を高める。

ファイトケミカルは、人体の抗癌機能を働かせる燃料にもなり、侵入して来た病原菌（細菌やウイルス）を破壊したり、異常細胞が癌になる前に殺したりします。DNAがどんどん損傷されて細胞変異が進むと、免疫システムが反応して細胞を除去しようと動き出し（アポトーシス）、異常細胞（前癌状態又癌になった細胞）が、生体を蝕む前に細胞の自殺が促される仕組みになっております。

動物性の食品群や栄養価の全くないもので、避けるべき必需品。

1. 砂糖
2. その他の甘味料
3. 精白小麦粉
4. 加工食品
5. 精製油等

緑葉野菜の微量栄養素は、身体の損傷を防ぎ、修復、再構築もします。人のDNAにメチル基がDNAの遺伝子に付いたり、離れたりする現象が、癌の発症リスクに関わっているのです。炭素1個と水素3個から成るメチル基がDNAの遺伝子に結合することをDNAメチル化といい、メチル基が水素原子に置き換わる事を脱メチル化といいます。このメチル化、脱メチル化によって、正常な細胞分裂が邪魔されたり、特定の細胞が異常に増殖したりする。それが癌なのです。研究により、緑葉野菜を多く摂っている人ほど発癌のリスクが低くメチル化変異を起こしにくいDNAを持っている事が分かり証明されました。つまり、緑色野菜の多量摂取→遺伝子のメチル化が減少→癌のリスクが減少という機序で発癌を抑制するのです。

緑葉野菜の中で1番免疫に効果があるアブラナ科の野菜は以下の通りです。

1. からし菜
2. チンゲン菜
3. ルッコラ
4. ブロッコリー
5. キャベツ
6. クレソン
7. かぶら菜
8. カブ
9. ケール
10. カリフラワー

アブラナ科野菜は、特別な化学組成を持ち、イオウ含有化合物が含まれています(辛味、苦味)。この、アブラナはミキサーに掛けられたり、刻まれたりして細胞壁が壊れると、化学反応を起こして、イソチオシアネート類(ITC)に変換されます。そして、このITCは強力な免疫強化作用と抗癌作用を持つ事が証明されています。

緑色野菜がスーパー免疫力の王様なら、キノコは女王様です。キノコに含まれる成分は、NKT細胞(NK細胞とT細胞の両方の機能を持ち、進入して来たウイルスに感染した細胞を集中的に攻撃して、癌細胞まで倒します)を活性化させることが知られています。

1. マイタケ
2. マッシュルーム
3. 霊芝
4. クレミノマッシュルーム
5. ポートベロマッシュルーム
6. ヒラタケはどれも抗癌作用を持ちます。

スーパー免疫力をつける、5つの基本ルール

- ①大盛りのサラダを毎日食べる。
- ②毎日少なくとも半カップ強の豆類をスープかサラダその他の料理で食べる。
- ③毎日3個の生の果物を食べる。特にベリー類、ザクロ、プラム、オレンジ
- ④毎日少なくとも、28gの生のナッツか、種子類を食べる。

⑤毎日少なくとも、大盛りサラダボール1杯の、緑葉野菜を食べる。

身体から脂肪を取り除く為には、先ず筋肉を付ける必要があることはよくご存知だと思います。人体が1週間で増やせる筋肉量は約450g、これが筋肉の繊維がたんぱく質を筋肉に変える能力の上限で、それ以上のタンパク質は脂肪に変わってしまいます。最近一般によく飲まれているプロテインのサプリメントは、お金の無駄と不健康です。使われないタンパク質は、脂肪として蓄えられるか、腎臓を経由して排泄されます。また、余分な窒素を尿で排出すると、骨からカルシウムその他のミネラルが、浸出され腎臓結石の原因となります。

野菜はアルカリ性ですが、動物性食品は酸性の為、胃で消化される際に、非常に多くの塩酸が中和される為に必要です。高タンパクの食時をした後は血液も酸性になり、酸塩基反応を起こして、カルシウムや、リン酸等のミネラルが、骨から溶け出し、骨粗しょう症の原因になります。

米国のステージ3の女性癌患者が、セカンドオピニオンとして、かかり付け医師から離れて、ジョエル・ファーマン医師に会って、免疫細胞の機能の発揮と強化するファイトケミカル（自然植物の中にある化学物質）を学び、料理のレシピで抗癌対策を実行したそうです。その患者は、癌のステージが1まで下がり、喜びの余り元のかかり付け医師に会いに言ったところ、「出て行け。」と言われたそうです。お解かりの様に、日米同盟の医学会のガイドラインの勧める考えと免疫を殺す化学医薬よりも、自然のベリー類キノコ類、豆類、種子類、果物類、そして緑黄葉野菜の中にあるファイトケミカルの方が偉大だという事が分かります。

さて、話を戻します。リウマチ、多発筋痛症、膠原病の原因についてあらゆる本を読みましたが、どの本も医学会のガイドラインに沿った、同じような内容でした。ある新聞記事には“身体を動かさなくなるASL（筋萎縮性側索硬化症）や、定期的に長時間の治療が必要な人工透析と異なり、初期の関節リウマチは身近な人にも見えにくい病です。主に関節の内側にある滑膜が炎症を起こして、腫れや、痛み、こわばり等の症状が起きる病気です。原因は不明ですが、免疫に異常が生じて、悪い免疫が、良い免疫を攻撃する事で起きる病気です”とありました。（これについて反論します。免疫同士が攻撃するとしたら、人間は癌にはならない筈です。何故ならば、人間の体内の中にある免疫細胞は、外的異物（化学物質）が入ってきた時に、自己と非自己を見分け、増殖する敵に対しては殺したり溶かしたりします。増殖しない化学物質に対しては殺したり、溶かしたり出来ないので、わざわざクラススイッチをして、IgE抗体を作り、体外へ排出します。

では、何故、免疫細胞は悪い癌を攻撃しないのかというと、癌細胞も正常な細胞もその人自身の細胞なので、免疫細胞は同類と考え攻撃をしないからです。本に記されている様に、良い免疫が悪い免疫を攻撃してくれたら、高額な薬害のある、抗癌剤を飲んだり、苦しんで死ななくて良いのです。従って免疫細胞

同士は、攻撃しないのです。

ただ言えるのが体内の中にいる60兆個の細胞は、毎日分裂を繰り返し、24時間で入れ替わる細胞数は数千億から一兆個です。そのため遺伝子の複製に間違い（ミスコピー）が起きても仕方が無いのです。そのミスコピーで生まれた細胞が癌細胞で、毎日5000から6000個が生まれています。これだけ多くの癌細胞が日々生成されているのに、ほとんどの人が、癌を発症しないのは、免疫細胞であるNK細胞（ナチュラルキラー細胞）や樹状細胞が日夜闘って、癌細胞が生まれる度に、これを見つけ次第退治してくれているからです。昨年、癌研究に熱心な医師が語っておられたのは、ご自分も癌患者で、調べによると、“ミスコピーで体内に入った癌細胞は、細胞分裂の激しく起こっている組織周辺に留まり、血管からバイパス（血管新生）をひき、ブドウ糖だけを吸収して増進して行く。研究の結果、血管にブドウ糖と化学構造式が同じビタミンC（アスコルビン酸）を入れたところ、癌細胞はビタミンCをブドウ糖だと思って吸収して壊死した。ビタミンCの血中濃度が高くなると、血液中の鉄分と反応を起こして過酸化水素となり、全身の毛細血管から体内に出ていきます。正常細胞はカタラーゼという酵素が過酸化水素を中和するので影響をまったく受けませんが、がん細胞はこのような要素を欠乏するため、すぐに過酸化水素に反応しダメージを受けて破壊されてしまいます。そのため、関東では抗癌剤よりこの治療法を勧めている医師もいます。

さて、新聞に出ていたリウマチの話に戻りましょう。“リウマチの完治は困難で、徐々に進行し、関節の変形や破壊、手足の機能障害に至る事もあります。薬（ステロイド）で、症状や進行を抑える治療法が一般的です。しかし免疫の働きを抑える薬の成分によっては、感染症や他の病気との合併症を起こす恐れもあります。40～60歳の発症が多く、女性の発症確率は男性の4～5倍とされ、日本リウマチ友の会によると、リウマチ発症により70%が社会生活、45%が結婚生活に影響があったと答えています。ちなみに、日本リウマチ友の会はステロイド使用の医師達によって作られています。”

このように、新聞記事も日本医学会のガイドラインに沿った文章が多いのですが、リウマチになって初めて病院へ行き、「痛み止めはあるが、治す薬はない。良くならない、徐々に症状が進んでいく。」と告げられたら、患者はたまったものではありません。

あとがき

過去に、松本院長ほど日本医師会に楯突いた医師はいたでしょうか。これは松本院長が本当に患者の立場に立ち、原因究明に没頭されてきたからできる事です。免疫学で培った理論と東洋医学の臨床経験を融合し治療を実行されたので、治らないとされている病気の治療法が見つかり数多くの患者が助かっています。一般的に病気とされているものは、自己治癒をしてくれる免疫細胞と異

物との戦いで生ずるもので、神経に関わる痛み、痒みという自覚症状に過ぎないです。特に免疫細胞が、体内全体の神経に潜んでいる悪賢いヘルペスウイルスを見つけ出し闘って殺す時には、筋肉やあらゆる内臓に炎症が起こり、病気が生じる事を、世界の医学者が（知ってか知らずか）何も語らないのです。さらに医学会が治療と言ってステロイド薬を使用している事に、松本院長は激高しておられます。

最後に、松本院長は、長き研究と経験を重ね、患者の症状の原因、ヘルペスウイルスの抗体価、遺伝子及び免疫反応の理論を天文学的に計算して、治療に変えて行った事を世界の医学会の先生方に理解してもらいたいです。そうすればノーベル賞に値し、ノーベル平和賞を受賞されるでしょう。また国内では国民栄誉賞、間違いなしです。

それを楽しみに残り少ない人生を、あと少しの病気と闘って生きます。